

平成 30 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

令和元年 5 月 16 日

代表者 権 明愛

研究課題名	発達相談支援における現職保育者が感じる相談員との知見の“ズレ”の解明
研究期間	平成 30 年 5 月 10 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日
共同研究者	長田瑞恵、齋藤忍、山田陽子、川喜田昌代、伊集院理子、呂小耘、関根佐也佳
1. 今年度の研究概要	
<p>保育所等一般の子育て支援システムの中での障害児の受け入れを進める等、「障害のある子とない子」の「共生」の重要性が政策全般で強調され、巡回による発達相談支援が今まで以上に重要な意味を持つようになった。一方で、障害児保育の担い手となる保育者が、障害児を保育していく過程で感じる困り感と不安感は大きく、相談員も、今まで以上に、障害のある子とない子が共に育つ環境を、如何に保育者と一緒になって構築していくかを考えていく必要がある。しかし、発達相談で、相談員が実践課題を提案する際、保育者との専門性、方法論の違いや関係性、経験等によって、両者の間で知見の“ズレ”が生じやすい。</p> <p>本研究では、発達相談過程で、相談員と保育者の間で、知見の“ズレ”が生じやすい点に着目し、現場保育者が発達相談で感じる相談員との知見の“ズレ”の具体的内容を解明し、保育現場における発達相談の質の向上を目指すことを目的とする。本研究は地域の障害児保育の質の向上に重要な意義を持つ。本研究は、昨年度の研究を踏まえ、今年度はまず文献研究を行い、基礎データを収集した。</p>	
2. 研究の成果	
<p>① 現職保育者が障害児保育で示す困難感について文献研究を通して、現職保育者が障害児保育で示す困難感について明らかにすることができた。</p> <p>② 現職保育者を対象に発達相談を実施する際に相談員が持つべき視点について、発達相談に関する研究の分析を通して、いくつかのポイントについて明らかにすることができた。</p> <p>③ 発達相談において現職保育者と発達相談員の間で生じやすい“ズレ”の要素を抽出することができた。</p>	
3. 研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）	
<p>（1）研究成果の公表実績</p> <p>本研究は、平成 30 年度からの継続研究である。平成 30 年度の研究はいかにして研究成果を発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本特別ニーズ教育学会において口頭発表を 1 件行った。 <p>発表テーマ： 現職保育者が障害児保育で示す困難感に関する研究動向</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 30 年度の幼児教育研究所の年報にその成果を論文にまとめて投稿した。 <p>（2）研究成果の発表予定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年 11 月に開催される日本特別ニーズ教育学会にて口頭発表で平成 31 年度の成果を発表する予定である。 ・令和元年度の大学の紀要論文集もしくは幼児教育研究所の年報において論文にして成果を発表する予定である。 	